

達磨が禅を嗤う：唐代の作務行禅

2021. 11. 13

大阪芸術大学教授（美術博士） 純 丘 曜 彰

概 要

六世紀の達磨が始めた壁観は、座禅よりも、身受心方の四念処観を日常生活に展開した四行法に基づき、その弟子の慧可、僧璨は、法難において、僧侶の読経座禅の特権生活を否定して作務を重視、七世紀には道信、弘忍が東山法門と呼ばれる一派を成す。そして、慧能に至って、不立文字、教外別伝、直指人心、見性成佛が明確に打ち出され、中観や理法論と万人成佛論が一体となって、そこに無差別の万物仏性論が生まれ、それこそが慈悲で多様性を包み込む禅宗独自の世界観となって、唐代の懐譲や石頭、馬祖、南泉や百丈、そして、滙山や趙州・徳山の自由闊達、融通無碍な禅風を生み、日常生活や天地自然と一体化する仰山と洞山の行となる。九世紀半ばの会昌の廃仏の後、各地を行脚することが行禅の新たな修養方法として広まり、師弟相伝よりも相互点検、一期一会の真剣勝負が活発に行われるようになるが、十世紀になると、士大夫のための不安払拭の座禅指導に墮してしまう。

1 中央アジアの新仏教	2
2 達磨の壁観行禅	4
3 インド仏教から中国仏教へ	6
4 教団分裂と南宋禅の確立	8
5 唐代禅宗の最盛期	9
6 禅宗の再生と継承	11

禅と言うと、座禅瞑想を思い浮かべるかもしれない。だが、それは違う。それどころか、唐代の禅宗は、徹底して座禅を否定した。そこにこそ、中国禅の革新性があった。

いまの禅僧の語る話など、まったく当てにならない。それは、いまの東京人に江戸の様子を聞くようなもの。そればかりか、自分たちの不都合と欺瞞を隠蔽するために、二度揚げの天ぷらのような部厚いコロモをまとって、世間を煙に巻いている。

ストレスだらけの現代生活で、たしかに座禅は意味があるだろう。だが、それは一種の

健康法。そんなものは仏教とは関係が無い。それどころか、自分が落ち着くために周囲のもろもろを自分勝手にシャットアウトするなど、我執そのもの。そして、実際、そういう独善的な座禅に対する反発からこそ、当時のほんものの禅は生まれてきた。

1 中央アジアの新仏教

仏教が成立したのは、紀元前500年ころ。諸派に分かれ、議論を重ね、大量の経典が作られる。それが紀元後一世紀ころにシルクロードを経て中国に伝わってきて、さかんに仏典漢訳が行われるようになる。ただし、もともと仏教がインド土着のバラモン教を下地にしているために、その無い中国において、「古訳」は、仏教を中国伝統の道教や儒教に合わせて理解する《格義仏教》（義を当てる）となった。

同じころ、インド仏教では、説一切有部（サルヴァースティヴァーディン）が主流だった。彼らは、仏教らしく縁起論は採るものの、これを不変不滅の諸要素の刹那的現象とした。しかるに、その滞りが惑いであり、見えない業を内側から起こして、人を苦しめる。それゆえ、この滞りを分析し、四諦（苦・集・滅・道）の智で解くことで、苦を脱することができる、と考えた。

しかし、このころ、北インドは、スレイマン山脈を越えて南下してきたクシャーナ朝に支配されており、中心ははるか北西、中央アジア（現アフガニスタン）に移っていき、二世紀前半、カニシカ王の元、ガンダーラ仏教文化で最盛期を迎える。とはいえ、ここもバラモン教の下地が無く、中国仏教同様、仏教とは名ばかりで、ヘレニズムとの習合を起こしていた。というのも、ガンダーラは、紀元前四世紀末にアレクサンドロス大王が侵攻したところであり、大量のギリシア系移民が残っていたから。

また、この地は、もとよりゾロアスター教の聖地で、アレクサンドロス大王を迎え入れたように、ここには救世主待望信仰があった。それゆえ、この中央アジアにおいて、彼らは、バラモン教の永劫の転生輪廻に代えて、永遠完全なプラトンの天上界を想定し、アミターバ（無量光、阿弥陀如来）という仏神を立てて、それが西の彼方の極楽浄土（地中海？）に救済してくれる、と考えた。

一方、南インドでは、バラモン（特権知識人）のナーガールジュナ（龍樹）が『中論』で空の哲学を説いた。彼は、説一切有部が基礎とするような不変不滅の諸要素の存在をも否定し、それ自体をも所縁に抛る、と考えた。ただし、その真実相は掴みどころが無く、かといって、概念で考察する世俗相は帰謬することから仮のものにすぎず、それゆえ、「中観」（判断中止）に留まるべきである、と主張。彼の哲学がその後の新仏教の大きな根幹となるが、彼はあくまで実践的な自然哲学者、錬金術師であって、彼自身が仏教を信奉していたかどうかは怪しい。

また、中国では、後漢の中央政府が宦官官僚たちに乗っ取られ、地方ではこれと結びついた豪族が独立領主化して、貧富格差が広がる。このため、庶民の間では道教系の太平道や五斗米道などの新興宗教が流行し、184年の黄巾の乱をはじめとして、各地で反乱が起きて、いわゆる魏呉蜀の三国志の戦乱時代へ突入。そして、280年、いったんは、晋によってどうにか統一される。

このころ中央アジアでは激変が起きていた。四世紀、カスピ海北岸にいた、疾走する騎馬で襲撃略奪する北方の野蛮な匈奴フン族が急拡大。その影響で、東の中国でも騎馬傭兵の独立と抗争が生じ、316年に華北が五胡十六国に分裂。また、匈奴フン族は西進して、ゲルマン人の大移動を引き起こすとともに、南下して、すでにサーサーン朝下に入っていた旧クシャーナ朝領を侵略し、エフタルを建国して、北インドのグプタ朝をも圧迫。多くの人々が亡命を強いられることになる。

384年、西域の羌族が華北の長安市を乗っ取って後秦を建て、401年、カシミール（ガンダーラ東の高地）に留学した同族の鳩摩羅什（クマラジーヴ、344～413）を迎え入れる。彼は、簡潔な意識漢文で仏典を訳し直し、これが「旧訳（くやく）」として、その後の中国仏教の基礎となる。ここにおいて、彼は、「古訳」の道教・儒教的曲解を排する一方、インドの古いバラモン教の原義に戻す代わりに、西方で最新のアミターバ信仰やナーガールジュナ哲学を大仰に紹介して紛れ込ませ、それこそが仏教の真髄であるかのように広めた。

アミターバ信仰とナーガールジュナ哲学は、相性が良かった。というより、セットで導入する必要があった。というのも、ナーガールジュナの不定形の自然哲学を取り込むと、所縁を成り立たせる諸要素まで所縁の現象としてしまうために、すべてが刹那の出来事に帰され、死を越えて次の生まで魂とその業を継ぐものが想定できなくなってしまったから。だから、死後を引き受けるものとして、極楽浄土のアミターバ信仰が継ぎ合わされた。

ところで、中国でも、抗争に明け暮れた華北と違って、長江下流の南京市を中心とする華南は、後漢滅亡後、呉、晋、宋、齊、梁、陳と王朝は移り変わったが、華北の亡命者を受け入れ、貴族社会が成立し、優雅な六朝文化が栄えた。ここにおいて、慧遠（334～416）は、華北長安市の鳩摩羅什と文通し、402年、同志百余名とともに長江下流の廬山で極楽往生の願を立て、アミターバ信仰の浄土教を興す。ただし、それは、あくまで極楽浄土の阿弥陀仏を念じる観法で、後世のように称名念仏を唱える易行ではなかった。しかし、ここにおいて、だれも訪れたことの無い遠い西の中央アジアのクシャーナ朝ガンダーラが、理想の仏教国家、実在の極楽浄土と考えられ、その信徒は日増しにふえていった。

カシミールに留学したこともある北インド僧ブッダバトラ（359～429）は、そのよしみで鳩摩羅什のところに来たが、王の同族の鳩摩羅什と違って、なまじ本場ものを知るインド人として長安市の有力僧侶たちに疎まれ、門弟40人とともに転じて華南の慧遠の下に逃

げて、ここで、北インド的な『ダルマトラータディアーナ（達磨多羅禅経）』を漢訳し、禅の修養法を紹介。

ブッダバトラは、後に南朝宋の皇帝に招かれ、首都建業市の道場寺で、カシミール的な『六十卷アヴァタンサカ（六十華嚴経）』も漢訳。これは、中央アジアで小経六十品がまとめられたもので、これらの小経を仏法を奉じる華にたとえて華嚴と言う。ここにおいて、時空を越えた理法そのものが盧舎那（大広光明）仏として賛美され、種々の相互干渉によって世界が成り立っている、と見る。これは、もはや人間としての悟り、輪廻解脱を求める北インドの仏教を越え、一神論と天地二元論の解決として三世紀エジプトで生まれた新プラトン主義を取り込んだ世界哲学となっている。

2 達磨の壁観行禅

439年、華北が北魏に統一され、南北朝時代となる。とはいえ、華北はもちろん、華南も、反乱戦争や王朝交代がおさまったわけではない。ここにおいて、バビロニア科学やガンダーラ文化の先進の知見を持って亡命してきた西方人（中央アジア・インド人）たちは、一種の霊能力者、軍政助言者として、各王朝で歓迎され、そのガンダーラ仏教も許容されるようになっていく。しかし、一般の人々は、あくまで中国伝統の儒教や道教の信奉者であり、中央アジア・インドから新たにきた魔術的な仏教に対しては強く反発した。

北朝北魏の孝文帝（467～帝71=99）は、496年、来中したインド人バトゥオのために、首都洛陽市東南50キロの嵩山（すうざん）に少林寺を建てた。（バトゥオは学僧ではなく武僧で、兵卒たちと集団で亡命してきたのか。）ここは西方科学文化の輸入拠点であるだけでなく、先進軍事技術の研究機関であり、要塞のような壁で囲まれた寺院の中では、僧兵が養成され、カラリパヤットゥ（院庭武法）と呼ばれるインド寺院伝来の拳法や棒術を訓練した。（今日、仏具とされているものの多くも、じつはカラリパヤットゥの奇妙な武器に起原を持つ。）

南朝として梁国を建てた南京市の武帝（464～帝502～49）もまた、西方科学文化の輸入に熱心で、多くの寺院を建立していた。そこへ、527年、南インドから達磨（?～?）が来た。武帝は達磨に会ったが、話が合わない。それで、達磨は長江を北に越えて、インドからの亡命者が集まる少林寺に行った。（達磨に西方科学文化の効用を聞いたが、達磨の答えは、役に立たない、だった。実際、カラリパヤットゥなどは、騎馬の匈奴フン族の急襲にはまったく無力だった。武帝はインド人達磨に技術者としての協力を期待したが、バトゥオと違って達磨は学僧だったらしい。）

梁の武帝はまた、534年、浄土教の阿弥陀信仰を語る気鋭の傅大士（ふだいし、497～569）を宮廷に招いた。しかし、武帝を座ったまま迎えたり、空を説く『金剛経』の講義を

無言で終えたり、儒仏道の奇妙な法衣で歩き回ったり、奇行を繰り返す。それでも、武帝は、彼に双林寺を建てて与えた。彼は後に、禅の先駆者として知られることになる。

一方、達磨は、面壁九年、少林寺で座禅を組んだという。座禅そのものは、バラモン教の時代からあり、仏教の開祖ゴータマシッダールタやその弟子たちも、それで修養している。それは、静かに座って瞑想し、特定の想念を焼き付けるものである。これによって、社会的な思い込み（盲信偏見）や個人的なトラウマ（心的傷害）などのような概念体系（イデオロギー）の歪みを正し整えるだけでなく、心因性の身体の不調（心的ストレスによる心身症）を除き、また、メンタルプラクティス（「イメージトレーニング」は和製英語）としてムダな緊張を除いて、潜在能力を完全に発揮させる。

それは、一種の催眠認知療法（心的抵抗を消した状態で対象を再認識する）であり、常人が睡眠中の夢などとしてふだんから行っていることを意識的に行うものであるが、座禅の「観（ヴィパシヤナ）」は、ただ特定の対象の概念を部分的に体系に組み込むのではなく、ある強烈な特定の想念を鍵として、概念体系全体を構造的に書き換え、世界そのものの認知の仕方をパラダイム転換させる。

バラモン教の時代からサマナ（修行者）の座禅の主流で、ゴータマ・シッダールタも行ったのは、「白骨観」。それは、死体を目の前に、それが腐敗し骨となって塵と消えるまでの様子を心に焼き付け、生から死、無までを一つながりのものとして捉えることで、生の意味を、その全体の中に位置付け直す。そして、このことを忘れないよう、その死体から剥ぎ取った死体袋＝袈裟をみずからまとった。

また、ゴータマ・シッダールタが正念を確立するために弟子たちに修養を勧めたのは、「四念処観」、すなわち、身・受・心・法の四つの点検。まず、身念では、爪先から髪末まで、ひとつひとつのパーツをつぶさに思うことで、自分が醜悪な肉片の集合体であり、執着するにたらない存在であることを知る。次に、受念では、さまざまな感覚や感情が生じる場面を思い、それらが縁起による一時の現象にすぎない、つまり、実体ではないことを知る。そして、心念では、混然一体の自分の意識や意志を破碎精錬していき、その中の各所に隠れ潜んでいる邪悪な妄想や嫉妬、欲望を徹底して取り除く。最後が法念だが、これは、その後の諸派で解釈が一致せず、五蓋（がい）を除き、七覚支に努め、無我の諸法の方に同調することらしい。

これが分析好きの説一切有部となると、観の対象が具体的なイメージから抽象観念に代わって、「四十業処観」にも膨れ上がる。すなわち、それは、十遍（地水火風など）、十不浄、十随念（仏法僧など）に加えて、四無量心、四無色界、食厭想、界分別。また、アミターバ信仰では、「般舟（はんしゅ）三昧（ざんまい）」として、極楽浄土の阿弥陀仏を想念する。さらにまた、呪術的な密教では、大日如来の太陽のイメージを中心に、知恵の金剛界、慈悲の胎蔵界の曼荼羅（諸仏楼閣模式図）をつぶさに観じて、内面化し、自身を再構築する。

しかるに、達磨は「四行法」を教え、「壁観」を説いた。経典学習から入る「理入」も認めた上で、彼は、実践体得から入る「行入」を勧める。この行は、四つ、報冤（ほうおん）行、随縁行、無所求（むしょぐ）行、称法行から成り、まず自分のリアクションを断ち、物事の因果に従い、みずから欲する因とはならず、摂理に即して暮らす。

この四行は、身・受・心・法の四念処観の座禅を日常生活に展開したものだ。ここにおいて、その観想点検の対象は、もはや自身の個々の部分などではなく、まるごとの自分自身という壁。達磨は、同じ南インドのナーガールジュナ哲学の影響を受け、中観の判断中止を壁として具体化し、過剰な分別の越権を杭い止めて、自由闊達な真実相の領域を解放した。

この行住坐臥の「壁観」、壁の想念を心に焼き付け、みずから壁になって生きる禅定は、もはやいわゆる座禅ではない。バラモン教・仏教の「観（ヴィパシヤナ）」の修養法を知らず、文字面だけから「壁観」を、壁を観る、と誤解して座り甘んじていると、達磨は立って逃げ去ってしまう。

3 インド仏教から中国仏教へ

少林寺の達磨の下に慧可（487～593）が訪れ、雪の中、みずから左腕を切り落として決意を示し、弟子入りを認められた。これは、僧兵養成の少林寺にあっても武術はやらない（達磨に対する梁の武帝のような誤解ではない）、仏道に専念することを意味したのだろう。ほかにも何人かの弟子がいたようだが、536年、この慧可に後が委ねられ、禅宗二祖となった。また、559年、これに僧璨（そうさん、c500～605）が弟子入りして、後に三祖となった。

慧可は、師の達磨に、修行の不安を癒やしてほしいと願った。達磨は、では、その不安を持ってこい、と言う。それに対して、慧可は、それが見つからない、と答えて、自分自身で、そんなものは最初から無い、ということに気づいた。また、僧璨も、全身のつらいアレルギーは前世の罪のせいだ、と悩んでおり、それで、師の慧可に、その罪を払ってほしい、と願った。それで、慧可も、それなら、その罪を持ってこい、と言って、僧璨もまた、そんなものは最初から無い、ということに気づいた。このように、禅宗は、インド的な旧仏教が強迫的に作り出していた心気症（病気だと思ふ心の病気）を否定解消する、言わばその洗脳解きとして最初の一步を踏み出す。

しかし、このころ、そんな自縄自縛の信心深い者ばかりではなく、徴税逃れのために信仰を口実にしてかってに逃散する者が続出し、彼らを囲い込んで寺院は、私領荘園を拡大、僧兵武装を強化。北周武帝（543～帝60～78）は、574年、傭兵となって反乱を助長する

仏教や道教を禁じて寺院や僧侶道士の財産を没収。その一方、真正の僧侶道士120名は官任として保護した。

この廃教政策を避けるべく、慧可や僧璨は南の長江の方に逃げた。また、南朝の首都、南京市にいた智顛（538～98）も、575年、長江下流の天台山に籠もり、鳩摩羅什の旧訳仏典を研究し、一切衆生は等しく成仏し救われるという、仏教の中で長年をかけて醸成されてきた大乘思想の『法華経』を中心として多くの仏典を体系的に位置づける独自の理論を構築していく。

この法難において、中国仏教は、バラモン（特権知識人）的インド仏教から大きく転換する。というのも、宮廷や村落から切り離され、山に隠れ潜むことで、仏僧は生活基盤を失ったから。インドのバラモン階級は、働かないことを旨とし、だからこそ、学究や拳法に明け暮れていた。そして、その僧侶の特権意識は中国の寺院にも引き継がれ、自分たちは読経や座禅に呆けて、仕事は寺男の僧兵たちにさせ、宮廷の保護に甘んじ、必要があれば僧兵たちに村々から力尽くで徴発させていた。しかし、それができなくなった。だが、禅宗は、もとより行禅で、自分たちで作務することに抵抗が無かった。また、天台宗も、一切衆生に仏性を認める立場で、門弟信徒とともに働くのは当然だった。

581年に南朝を吸収して全土を統一した隋は一転して仏教治国策を採り、全国各地に寺院を建てて、国民の信仰を促した。しかし、みずから作務して僧侶の特権性を否定する行禅を説く慧可は、勢いを取り戻した寺院にいらまれて殺されてしまう。一方、592年、長江中流、舒州の皖公山の僧璨の下に14歳の道信（580～651）が入門。彼もやはり解脱できずに悩んでいたのも、僧璨は、その縛っているものを持ってこい、と言って、そんなものは無いことに気づかせた。同じころ、煬皇子（569～帝604～18）が、天台山の智顛（538～98）に帰依し、天台宗として隆盛。

天台宗の智顛はまた、仏典だけでなく、修養法についても『摩訶止観』として百科全書的な体系化を試みる。ここにおいて、彼は、瞬々の念も全宇宙を反映しているという一念三千の「心観」から、次第（修養階梯）を排して一気に一悟円頓を得ようとする。つまり、これもまた、座禅ではなく、日常の行住坐臥すべてにおいて心観に徹する行禅だった。ここにおいては、阿弥陀仏を心中に観するだけではなく、休み無くその名を口で唱え続ける称名念仏も推奨される。

618年、隋を滅ぼした唐は、長安市を首都として、道教を国教とし、仏教を排除。しかし、その長安市で、杜順（557～641）が病氣平癒などの神通力を持つと評判になり、第二代皇帝太宗李世民（598～帝626＝49）に召し出されて「帝心」とされ、広く崇敬を集めた。そして、彼は、天地自然の理法を光の盧舎那仏として尊ぶ華嚴宗を立てる。

一方、禅宗では、道信が四祖となって、630年ころ、遠く長江中流、九江市北20キロの山中に定住して布教。五祖となる弘忍（ぐにん、602～75）とともに多くの弟子を集め、

「東山法門」とよばれる一派を成す。同じころ、洛陽市の玄奘（602～64）も、密出国してインド東部のナーランダ大学で唯識論を学び、645年に大量のサンスクリット仏典を持ち帰って、「新訳」として原文に忠実な翻訳に努め、唯識論に基づく新たな法相宗を起す。

4 教団分裂と南宋禪の確立

湖北省双峰の東山法門は、およそ七百名に膨れ上がり、当然、皇帝親族で秀才型の筆頭弟子、神秀（じんしゅう、606～706）が跡を継ぐと目されていた。しかし、661年、心の明鏡から努めて塵を払う、と、彼が壁に書くと、だれかが、明鏡など無い、まして塵があるろうか、と書き足した。五祖弘忍は、それを書かせた、字の読み書きもできない寺男の慧能（えのう、638～713）を認め、達磨以来の衣鉢を与えつつ、おまえの身が危くなる、として、ひそかに長江の南へと逃がした。はたして、その後、東山法門内は騒然となり、神秀も行方知れずとなる。（このころ、道教を国教とする唐は、仏教の盛んな朝鮮半島の征服で苦戦しており、彼らもこの問題に巻き込まれたか？）

675年の五祖弘忍没後、神秀は、荊州市東北50キロの当陽山の度門寺を拠点として、華北黄河へ布教し、「北宗」を興す。彼は、同時代の天台宗や法相宗、華嚴宗と近く、心観唯識をもって、心を払い清めて透過し、その向こうの普遍の空の真実相の理法と通じる修養法を唱え、それが農耕などの作務よりもさらにありきたりな食事や入浴などの日々の生活の中にあると教えた。（つまり、北宗は、後に神会が批判するような漸悟座禪ではなく、むしろ南宗と同じ頓悟行禪だった。）

一方、五祖弘忍の衣鉢を嗣いで身を隠していた慧能も、676年、中国南岸の広州で見つかり、「南宗」六祖として広州市北百キロの曹溪山中の宝林寺に多くの弟子たちを集めた。ここにおいて、達磨以来の禪宗の旨として「不立文字（ふりゅうもんじ）、教外別伝（きょうげべつでん）、直指人心（じきしにんしん）、見性成仏（けんしょうじょうぶつ）」が明確に打ち出される。それは、経典に頼らず、分別を立てず、教えに因らずに離れて伝える。というのも、世界と一体の人間の心を直接にめざし、そこに普遍の理法を識れば、みずからも仏になれるから、ということ。いずれにせよ、これは座禪では無い。

しかし、華北の首都、長安（西安）市で、則天武后（624～705）が高宗の後の座を奪い取って、その死後に事実上の女帝となると、すでに華北に勢力を拡げていた北宗禪の神秀の方が、その帰依を受け、武后の子の中宗（656～帝705＝10）・睿宗（えいそう、662～帝710＝12～16）の時代まで、「長安・洛陽両京の法主」「三帝の国師」として権勢を極める。則天武后はまた、華嚴宗も庇護し、法蔵（644～712）がその教学を大成する。

慧能も亡くなって、劣勢に立たされた南宗禪は、716年ころ、神会（じんね、684～758

）が華北の南陽市に乗り込み、両者ともに亡き慧能と神秀の優劣を論じて、激烈な北宗禅批判を展開。ここにおいて、神会は、一気にパラダイム転換する天台宗的な頓悟を主張し、神秀や北宗禅を、徐々に曇りを払っていく漸悟と決めつけ、これを五祖弘忍はよしとしなかった、と言う。とはいえ、天台宗の場合、一念三千、すなわち、瞬々の念も全宇宙を反映していることを弁える心観があつての一悟円頓だが、壁の向こうの真実相を垣間見ただけの頓悟風体験では、どのみちそのとき限り。

実際、神会は、立ち回り上手な覚者風の俗物であり、北宗批判によって、代わって朝廷に取り入ることこそが目的。このため、一時は首都洛陽市を追放されたが、755年、北方で安史の乱が起きると、軍費調達のための有料の僧籍公認制を進言し、この功績で第十代皇帝肅宗（711～帝56=62）に重用されるに至る。しかし、彼は58年に死去してしまい、代わって、四十年来、河南南陽の白崖山に籠もっていた兄弟子の慧忠（675～775）が肅宗・代宗（726～帝62=79）の二代に招かれ、「国師」（忠国師）となり、この後、禅南宗内において神会一派は、しだいに衰えていってしまう。

なお、慧能門下の高弟には、神会や慧忠のほかに、行思（ぎょうし、660～740）、玄覺（665～713）、懷讓（えじょう、677～744）がいた。行思は、慧能に工夫の進み具合と問われて、最初もおぼつかないのですから、程度もなにも、と答えて認められ、筆頭に据えられた。玄覺は、天台宗で止観を修めた後、生死の大問題と言っていきなり押しかけ、慧能を圧倒。かと思えば、懷讓は、慧能に会っても自己紹介もできずに、八年後によく、それらしいものは言えても、どうも違う、と答えて、これまた慧能を驚かせた。

これらから見るに、禅宗というものを確立した六祖慧能は、ナーガールジュナ哲学の中観、達磨の壁観、天台宗でも重視していた大乘仏教の法華経の万人成仏論、法相宗の唯識論、そして、華嚴経の理法論などを聞き伝えでなんでも取り込み、それを二祖三祖の作務の行禅の中に生かしていた様子がうかがえる。しかし、それはたんなる寄せ集めではなく、中観や理法論と万人成仏論が一体となって、そこに無差別の万物仏性論が生まれ、それこそが慈悲で多様性を包み込む禅宗独自の世界観、自由主義となっていく。

5 唐代禅宗の最盛期

慧能の後、行思は、長江の南の支流、故郷江西省吉安市郊外の青原浄居寺を拠点とし、懷讓は、そこから200キロほど西の衡陽市、その北30キロの郊外の天台宗二代、慧思の建てた湖南省南嶽般若寺を継承。しかし、行思の跡を嗣いだ弟弟子の石頭（700～90）は、懷讓と同じ南嶽の石上に庵を結び、これを南台寺としたため、両法系は、ここで再び一つとなり、その後も、広大な中国にあつて、長江武漢市の南、東京・名古屋より近い南昌市・長沙市の間の周辺百キロ圏内の山中で、弟子たちが相互に点検しあつて切磋琢磨し、その最盛期を迎える。

その禅風は、読経座禅を否定する作務行禅だった。たとえば、馬祖（709～88）が熱心に座禅に努めていると、師の懷讓は、横で瓦を磨き出し、鏡にしたい、と言って、ちゃかす。そして、動かぬ牛車の車を打って走らそうとするようなものだ、と言う。それは、いくら尻を落ち着けても、心は落ち着くまい、尻ではなく心を座らせろ、ということ。

慧能南宋禅の弟子第二世代としてかく学んだ馬祖は、懷讓の跡を嗣ぎ、769年、山中奥深い南嶽を出て、六代玄宗（685～帝712=56）がかつて皇帝崇拝のために定めた市内の官営大寺院、洪州（江西省南昌市）開元寺に移る。おりしも、科挙が定着し、新興地主層が知識人官僚、士大夫を出すようになっており、彼らは、土着の儒教や道教よりも、外来の仏教を好み、とくに仏典の学習や長期の修養を無用とする禅宗に惹かれた。ここにおいて、馬祖が「平常心こそが道」と言い、在家でもできる作務行禅を説いたのだから、多くの人々が聴講に押しかけた。

南泉（748～835）もまた、そのひとり。彼は、すでに多くの経典を学んでいたが、馬祖の話聞いて、これらを棄て、作務行禅に転じ、長江下流の池州の山に籠もった。百丈（749～814）も、徹底して作務行禅を体現し、788年に馬祖が亡くなって後、かつて二祖三祖が自活して法難を避けたような洪州大雄山（南昌市と長沙市の間）の奥深い山中に、あえて仏殿を持たない（仏像を拝まない）修道院、郷導庵（現大智寿聖寺）を開き、「清規」を定めて作務行禅を行った。ここでは「一日作さざれば一日食わず」という標語で知られるように、高齢の庵主百丈本人も田畑を耕し、開墾を進めた。

滄山（いさん、771～853）は、793年、この百丈の郷導庵に入り、820年、湖南省長沙市の西百キロの大滄山密印寺で教導に当たった。また、827年ころ、ビンの中のガチョウを救ってくれ、と、池陽地方長官に請われて南泉が下山。たちまちに数百人の門弟が集まった。とはいえ、碩学深慮の南泉老師は、師の馬祖さえも罵り、猫を一刀両断にするなど、その奇矯な禅風で、なかなか常人の及ぶところではなかった。ところが、ひとり趙州（じょうしゅう、778～897）は、わらじを頭に乘せて応えてみせるなど、融通無碍。馬祖の「平常心こそが道」を引く師の南泉に対して、みずからを、四方八方に抜けられる四大門だ、などとうそぶく。また、石頭の弟子筋の徳山（780～865）は、ナーガールジュナ哲学の中観（判断中止）に徹し、無駄口を叩く者を容赦なく棒で打ち据えた。

676年に六祖慧能が南宗禅を建てた後、懷讓・石頭、馬祖、南泉・百丈、滄山・趙州・徳山ときて、弟子の第五世代にあたるのが、仰山（ぎょうざん、804～90）と洞山（とうざん、807～69）。仰山は、湖南省の密印寺で滄山に弟子入りして、不立文字を徹底。誠心誠意、ただ喰って働いて寝ることのみに努めた。洞山も、いったんは滄山に弟子入りをしたものの、命あるものを越える華嚴経的な天地自然の理法に関心を深め、石頭の弟子筋で、長沙市東南50キロのところに庵を構えていた雲巖の下に送られ、そこで川に映る自分を見て、天地自然の「仏声」を全身で聞くようになった。

ところで、そのころの唐の政治は、結託する中央宦官官僚・地方士大夫（豪族官僚）にぎゅうじられており、九世紀にはいると、連中は利権の奪い合いで激烈な党派争いを繰り広げ始めた。ここにおいて、当時隆盛したという仏教大寺院も、じつは彼らの脱税蓄財機関としてであって、名目上の寄進荘園として彼らの私有地への課税を免除させ、巨大な仏像や多様な仏具も、金銀銅などの通貨貴金属を彼らが大量に溶かし隠し持つ手段にすぎなかった。おまけに、仏教大寺院は、城郭要塞のように堅牢な伽藍の中で僧兵ミリシア（私設武装組織）を養成保持し、これを傭兵として貸し出して、宦官・士大夫の紛争を助長した。

840年に即位した第十八代武宗（814～帝40=46）は、帝位を争った叔父が仏教勢力を背景としていたこと、西のチベットで仏教勢力が政権を乗っ取ってしまったこともあって、朝廷において仏教勢力とつながる宦官勢力を排して81名の道教道士で固め、845年、「会昌の廃仏」として、仏教ほか、マニ教などの東方異教を禁止。これによって、寺院だけでも4600ヶ所以上、専従僧尼行人あわせて40万人以上、総寺田面積千平方キロメートルが廃されたとされ、いかに当時の仏教（＝秘密銀行）が異常に膨れ上がっていたか、よくわかる。

しかるに、禅宗もこの廃仏の影響を受け、瀋山の長沙市密印寺なども閉鎖され、瀋山本人も還俗させられた。だが、その弟子の仰山らは、仏典も仏像も不要なので、身ひとつで仲間たちと長沙市から東南へ百キロ、百丈の郷導庵の西南百キロの奥深い山中に隠れ、そこで作務行禅の百丈清規に従って耕作開墾し、自給自足の生活を送って難を逃れた。また、徳山は、長沙市の西北百キロ、軍事要塞の太浮山に籠城。なお、この間、趙州はもとより一所に住せず、洞山もまた天地自然と同化し、どちらも皇帝の威の及ぶところではなかった。

6 禅宗の再生と継承

とはいえ、弾圧は一年と続かなかった。武宗が道教の怪しげな丹薬の飲み過ぎで、翌846年には33歳で死んでしまったから。瀋山も僧籍に復帰し、湖南省密印寺を再開。趙州や仰山、洞山の世代も、それぞれに門弟の育成を始める。しかし、趙州や洞山などの影響か、このころから「雲水」として、寺内の作務に留まらず、各地を行脚することが行禅の新たな修養方法として広まり、師弟相伝よりも相互点検、一期一会の真剣勝負が活発に行われるようになる。

ここにおいて、南宗禅は、五つの禅風に分かれていく。瀋山や仰山の法系を嗣ぐ瀋仰宗は、一寺に留まり日常の行住坐臥の中に作務行禅を磨く保守的な禅風で、法難の後に復興し、隆盛。一方、同じ百丈の弟子筋ながら、黄檗（？～850）、臨濟（？～867）の法系、中国臨濟宗は、華北東岸の河北省を拠点とし、細い文脈の針穴を直観で貫き抜けるような

峻厳豪放な「喝」の禅風で、難解なうえに唐末の地方混乱で低迷。

一方、中観に徹して「棒」で知られる徳山は、その後、雪峰（822～908）らを育て、その弟子の雲門（864～949）から雲門宗ができる。ここにおいては、いっさいのムダ口は許されず、端的に相手の中心を射るように鋭敏な、それでいてすべてを飲み込むように度量の大きな問答が求められ、一字関のように簡潔にして重厚な多くの禅語が生まれ、唐末から宗代にかけて人気となった。

洞山の弟子、曹山（840～901）に発するとされるのが、中国曹洞宗。華厳経的な天地自然の仏声を聞くことから、人間の言葉での語り伝えよりも黙照が重視されるが、しかし、まさに黙照ゆえに、これも途絶えてしまう。また、徳山、雪峰の弟子筋で、雲門とは別門下の法眼（885～958）が五代十国時代に興したとされるのが、法眼宗。彼は、南唐を建てた皇帝李昇（889～帝937=43）によって首都南京市に国師として招かれ、広く政治的な保護を受けて華南で勢力を伸ばした。しかし、これは、禅宗に限らず天台宗や浄土宗も学べる、いわば西方文化総合学校。

唐の滅亡（907）、五代十国時代の混乱を越え、宋代（960～1279）になると、すでに脱税預託銀行・私設武装組織としての仏教大寺院の存在意義は失われており、いずれの伝統宗派の經典研究も廃れた。ただ、庶民は、念仏口唱の易行で救済されるという浄土宗に飛びつき、士大夫階級は、公的には国教の儒教を旨としながらも、私的には禅宗を好み、生き残ってきた保守的な瀋仰宗と先鋭的な雲門宗だけでなく、看話（かんな）の中国臨済宗と黙照の中国曹洞宗が復興。ただし、法眼宗は、国教としての保護を失うと、急激に衰退。また、瀋仰宗は、その後、勢いを増した臨済宗に吸収されてしまう。

士大夫階級が禅を好んだのは、宋が科挙を徹底し、その試験科目である四書五経を学ぶ以前に、科挙に取り組む姿勢が問われたから。科挙は、ただ本人ひとりの就職問題ではなく、科挙に合格して官僚特権を得られるかどうか、地方地主としての一族の命運がかかっていた。しかし、その不安定さは、科挙で終わるものではなく、官僚として政争の中を生き抜く間にも、つねにつきまとっていた。

ここにおいて、行脚はもちろん作務も失われ、真実相を体現する行禅が、不安払拭のためだけのノイズ・シャットアウトの座禅へと変質していく。禅宗の大寺院の方も、唐代のように貴族からの寄進も集められない以上、みずからの作務修養より、一般向けの売りものの座禅指導、教程整備に力を注ぐ。また、士大夫にしても、禅宗の修法をむしろ儒教の方に取り込み、朱子学や陽明学に惹かれていくようになる。

そして、残念ながら、その後に日本に輸入されるのは、この宋代の売りものの士大夫座禅で、それは最盛期、唐代本来の、切磋琢磨の作務行禅とは似て非なるものだった。ところが、平安貴族や庶民が浄土宗を好んだのに対して、中国士大夫以上にストレスに晒されている武士階級が台頭し、彼らは禅に救いを求めた。この結果、呑気な寺院の座禅ではな

く、戦闘や会見という一触即発の命がけの武士の作務の中に、禅本来の精神が再生。武道や茶道として、事実上の行禅が成り立ってくる。